

文學7 現代語研究村上春樹『1Q84』の語彙表現

萩原 義雄

題名「1Q84」

○1Q84——私はこの新しい世界をそのように呼ぶことにしよう、青豆はそう決めた。Qはquestion markのQだ。疑問を背負ったもの。彼女は歩きながら一人で肯いた。好もうが好むまいが、私は今この「1Q84年」に身を置いている。私の知っていた1984年はもうどこにも存在しない。今は1Q84年だ。空気が変わり、風景が変わった。「BOOK1〈4月―6月〉202頁⑧～⑫」

○見かけにだまされないように。現実というのは常にひとつきりだ。「BOOK1〈4月―6月〉27頁⑬」

○「現実はいっだってひとつしかありません」、書物の大事な一節にアンダーラインを引くように、運転手はゆつくりと繰り返し返した。「もちろん」と青豆は言った。そのとおりだ。ひとつの物体は、一つの時間に、一つの場所にしかいられない。アイシュタインが証明した。現実とはどこまでも冷徹であり、どこまでも孤独なものだ。「BOOK1〈4月―6月〉23頁⑬～⑰」

○そういうことをしますと、そのあとの日常の風景がいつもと少し違って見えてくるかもしれません。でも見かけにだまされないように。現実というものは常にひとつきりです。「BOOK1〈4月―6月〉198頁③④」

※文章とは…

○どうしてかというとな、良い文章を書こう、うまい文章を書けるようになりたいというつもりが、本人に露ほどもないからさ。文章つてのは、生まれつき文才が具わっているか、あるいは死にもぐるいの努力をしてうまくなるか、どつちかしかないんだ。そしてこのふかえりつて子は、そのどつちでもない、見ての通り天性の才能もないし、かといって努力するつもりもなさそうだ。どうしてかわからん。でも文章というものに対する興味がそもそもないんだ。物語を語りたいたいという意志はたしかにある。それもまなり強い意志であるらしい。そいつは認める。それがナマのかたちで、こうして天吾くんを惹きつけ、俺に最後まで原稿を読ませる。考えようによつちやたいしたもんだ。にもかかわらず小説家としての将来はない。南京虫のクソほどもない。君をがっかりさせるみたいだけど、ありていに意見を言わせてもえらばそういうことだ「BOOK1〈4月―6月〉38頁⑰～39頁⑰」

○文章を書くことは、彼にとつて呼吸をするのと同じようなものだった。「BOOK1〈4月―6月〉44頁⑦」

○「もちろん頭から尻尾まで作り替える。物語の骨格はそのまま使う。文体の雰囲気もできるだけ残す。でも文章はほとんどそっくり入れ替える。いわゆる換骨奪胎だ。実際の書き直しは天吾くんが担当する。俺が全体をプロデュースする」「BOOK1〈4月―6月〉49頁②～④」

○『空気さなぎ』の原稿の最初の数ページを切りの良いところまで、原文のままワードプロセッサーの画面にタイプした。ひとまずこのブロックを納得いくまで書き直してみよう。内容そのものには手を加えず、文章だけを徹底記に整えていく。マンションの部屋の改装と同じだ。基本的なストラクチャーはそのままにする。構造自体に問題はないのだから。水まわりの位置も変更しない。それ以外の交換可能なもの——床板や天井や壁や仕切り——を引きはがし、新しいものに置き替えていく。俺はすべてを一任された腕のいい大工なのだ、と天吾は自分に言い聞かせた。決まった設計図みたいなものはない。その場その場で、直感と経験を駆使して工夫していくしかない。一読して理解しにくい部

分に説明を加え、文章の流れを見やすくした。余計な部分や重複した表現は削り、言い足りないところを補った。ところどころで文章や文節の順番を入れ替える。形容詞や副詞はもともと極端に少ないから、少ないという特徴を尊重するとしても、それにしても何らかの形容的表現が必要だと感じれば、適切な言葉を選んで書き足す。ふかえりの文章は全体的には稚拙であったものの、良いところと悪いところがはつきりしていたから、取捨選択に思ったほど手間はかからなかった。稚拙だからわかりにくく、読みにくい部分があり、その一方で稚拙ではあるけれど、それ故にはつとさせられる新鮮な表現があった。前者は思い切りよく取り払って別のものに替え、後者はそのまま残せばいい。「BOOK 1 (4月―6月) 126頁⑱～127頁⑰」

○書き直しの結果、原稿量はおおよそ二倍半に膨らんだ。書きすぎているところよりは、書き足りないところの方が遙かに多いから、筋道立てて書き直せば、全体量はどうしても増える。なにしろ最初がすかすかなのだ。文章が筋の通ったまともなものになり、視点が安定し、そのぶん読みやすくなった。しかし全体の流れがどこもなくもったりとしている。論理が表に出すぎて、最初の原稿の持っていた鋭い切れ味が弱められている。次におこなうのは、その膨らんだ原稿から「なくてもいいところ」を省く作業だ。余分な贅肉を片端からふるい落とししていく。削る作業は付け加える作業よりはずっと簡単だ。その作業で文章料はおおよそ七割まで減った。一種の頭脳ゲームだ。増やせるだけ増やすための時間帯が設定され、その次に削られるだけ削るための時間帯が設定される。そのような作業を交互に執拗に続け、ているうちに、振幅はだんだん小さくなり、文章量は自然に落ち着くべきところに落ち着く。これ以上は増やせないし、これ以上は削れないという地点に到達する。エゴが削り取られ、余分な修飾が振るい落とされ、見え透いた論理が奥の部屋に引き下がる。天吾はそういう作業が生来得意だった。生まれながらの技術者なのだ。餌を求めて空を舞う鳥の鋭い集中力を持ち、水を運搬するロバのごとく忍耐強く、どこまでもゲームのルールに忠実だった。「BOOK 1 (4月―6月) 129頁③～129頁⑱」

○彼はその文章を紙にいったんプリントアウトした。それから文書を保存し、ワードプロセッサの電源を切り、機械を机の脇にどかせた。そしてプリントアウトを前に置き、鉛筆を片手にもう一度念入りに読み返した。余計だと思える部分を更に削り、言い足りないと感じるところを更に書き足し、まわりに馴染まない部分を納得がいくまで書き直した。浴室の細かい隙間に合ったタイトルを選ぶように、その場所に必要な言葉を慎重に選択し、いろんな角度からはまり具合を検証する。はまり具合が悪ければ、かたちを調整する。ほんのわずかなニュアンスの相違が、文章を生かしても、損ないもある。ワードプロセッサの画面と、用紙に印刷されたものでは、まったく同じ文章でも見た目の印象が微妙に違ってくる。鉛筆で紙に書くのと、ワードプロセッサのキーボードに打ち込むのでは、取り上げる言葉の感触が変化する。両方の角度からチェックしてやる必要がある。機械の電源を入れ、プリントアウトに鉛筆で書き込んだ訂正箇所を、ひとつひとつ画面にフィードバックしていく。そして新しくなった原稿を今度は画面で読み直す。悪くない、と天吾は思う。それぞれの文章がしかるべき重さを持ち、そこに自然なリズムが生まれている。「BOOK 1 (4月―6月) 130頁⑫～131頁⑮」

「…っぽい」表現

○こんな荒っぽいものを最終選考に残してみる。選考委員の先生方はひっくり帰っちゃうぜ。「BOOK 1 (4月―6月) 37頁⑰」

○そして小松ほどの有能な男が、そんな子供っぽい動機から危険な橋を渡ろうとしていることを知って、言葉を一瞬失ってしまった。「BOOK 1 (4月―6月) 51頁⑮」

○じゃあなんで、多くの人がこの教団に引き寄せられかっという、私が思うに、まずだいいちに教っばくないせだね。とてもクリーンで知的で、シスマテチックに見える。「BOOK1〈4月―6月〉517頁⑮」

○私はどっちかという見かけは女っばい方だし、あなたははつきりとしてボーイッシュな感じだし、組み合わせとしちゃ悪くないと思うんだ」「BOOK1〈4月―6月〉246頁⑬」

○「ところで、私たちの真後ろのテーブルに中年っばい二人連れがいて、さっきから物欲しそうな目であちこち見ているんだけど」とあゆみが言った。「BOOK1〈4月―6月〉254頁④」

象徴語表現

A 擬態語表現

○俺が望んでいるのは、文壇をコケにすることだよ。うす暗い穴ぐらにうじやうじや集まって、お世辞を言い合ったり、傷口を舐め合ったり、お互いの足を引っ張り合ったりしながら、その一方で文学の使命がどうこうなんて偉そうなことをほざいているしようもない連中を、思い切り笑い飛ばしてやりたい。システムの裏をかいて、とことんおちよくってやるんだ。愉快と思わないか?」「BOOK1〈4月―6月〉50頁⑱～51頁⑳」

○しかしいつまでもこんなところでうろろうしているわけにはいかない。「BOOK1〈4月―6月〉62頁⑩」

○「あの、深山さま」、青豆はおずおずと言った。「BOOK1〈4月―6月〉69頁⑫」

○天吾は背が高く、がっしりした体格で、額が広く、鼻が細く、耳のかたちは丸まってくしゃくしゃしている。「BOOK1〈4月―6月〉313頁⑨」

○そしてベッドの中ではがっがつとして、セックスの本当の楽しみ方を知らない。「BOOK1〈4月―6月〉237頁⑬」

○汚れた洗濯物を押し込めるだけぎゅうぎゅう押し込んだトランクみたいなものだ。「BOOK1〈4月―6月〉196頁⑮」

○案の定、何かの加減でボルトがはずれたらしく、金属板がぐらぐらしている箇所がひとつ見つかった。「BOOK1〈4月―6月〉63頁⑨」

○父親はそんなことをいつまでもくどくどしゃべり続けた。「BOOK1〈4月―6月〉316頁②」

○トム・コリンズをひとくち勢いよく飲み、両手の手にひらをごしごしとこすった。「BOOK1〈4月―6月〉255頁⑫」

○裏でこそこそ動きまわらくちやなりません。「BOOK1〈4月―6月〉54頁⑭」

○青豆のそれ（陰毛）はごわごわとして硬い。「BOOK1〈4月―6月〉60頁⑮」

○今朝まで、ほんの数時間前まで、警官たちはいつものごわごわした制服を着て、「いつもの無骨な回転拳銃を身につけていたのだ。「BOOK1〈4月―6月〉65頁⑥」

○で、とにかく、俺の計画みたいなものをざらつと説明した。「BOOK1〈4月―6月〉78頁⑰」

○あたりがしんとした。「BOOK1〈4月―6月〉120頁⑱」

○なにしろ最初がすかさずなのだ。「BOOK1〈4月―6月〉129頁⑵」

○もし乗り越えられたとしても、服はずたずたになってしまふ。ために扉を押したり引いたりしてみたが、ぴくりとも動かなかった。「BOOK1〈4月―6月〉62頁⑥・⑦」

○いったん位置を定め、心を決めると、彼女は右手のたなごころを空中に浮かべ、息を止め、わずかに間を置いてから、それ（アイスピックに似たもの）をすとんと下に落とす。「BOOK1〈4月―6月〉71頁⑯」

○軽く、慈しむように、適正な角度で、適正な強さで、たなごころを下に落とす。重力に逆らわずに、すんと。〔BOOK1〈4月―6月〉71頁⁽¹⁹⁾〕

○右手のたなごころを木製の柄の部分にすんとと振り下ろす。〔BOOK1〈4月―6月〉119頁⁽⁵⁾〕
○青豆はドアを少しだけ開け、あたりをうかがい、廊下に誰もいないことを確かめてからするりと部屋を出た。〔BOOK1〈4月―6月〉75頁⁽⁸⁾〕

○勤務時間が不規則だから、普通の勤め人とは時間が合わないし、それにちよつとうまく行きかけても、私が警察官をしているとわかったとたんに、普通の男ってみんなするする引いちゃうんだ。蟹が波打ち際を逃げていくみたいに。ひどい話だと思わない? 〔BOOK1〈4月―6月〉252頁⁽¹⁹⁾〕

○それから青豆は隣に置いてあったショルダーバッグを肩にかけ、オンザロックのグラスを手に、席を二つぶんするりと移動し、男の隣の席に移った。〔BOOK1〈4月―6月〉107頁⁽¹⁰⁾〕

○それから自分もするりと中に滑り込み、間を置かず扉を閉めた。〔BOOK1〈4月―6月〉147頁⁽¹³⁾〕

○大きなずんぐりとしたショルダーバッグだけがいささか場違いだ。〔BOOK1〈4月―6月〉66頁⁽⁸⁾〕

○女主人はティーポットの蓋をとり、香りを嗅ぎ、葉の開き具合をたしかめてから、それを二つのティーカップにそろそろと注いだ。〔BOOK1〈4月―6月〉153頁⁽¹⁾〕

○それから責めるような視線を青豆にちらりと送った。〔BOOK1〈4月―6月〉24頁⁽¹³⁾〕

○それから腕時計にちらりと目をやった。〔BOOK1〈4月―6月〉35頁⁽⁶⁾〕

○胸の谷間をちらりと見せる必要はなかった。〔BOOK1〈4月―6月〉72頁⁽¹¹⁾〕

○ふかえりは天吾をちらりと見て、それからまた顔を正面に向けた。〔BOOK1〈4月―6月〉176頁⁽¹²⁾〕

○「芥川賞。それくらい世間知らずの天吾くんだったって知っているだろう。新聞にでかと出て、テレビニュースにもなる」〔BOOK1〈4月―6月〉48頁⁽¹⁾〕

○世界はゆるい粥かゆのようにどろどろとして骨格を持たず、捉えどころがない。〔BOOK1〈4月―6月〉31頁⁽²⁾〕

○空気はどろりとした液状になっている。〔BOOK1〈4月―6月〉32頁⁽¹⁸⁾〕

○のっぴりとした平板な土地に、これという特徴のない建物が、どこまでも際限なく建ち並んでいる。〔BOOK1〈4月―6月〉180頁⁽⁹⁾〕

○男ははつと息を呑む音が聞こえた。〔BOOK1〈4月―6月〉72頁⁽⁷⁾〕

○天吾ははらはらしながら、ドアのグリップにずつとしがみついていなくてはならなかった。〔BOOK1〈4月―6月〉208頁⁽¹⁶⁾〕

○年号をプリントされた白いカードが、強風の中で四方八方にばらばら散っていく光景が目に見え。〔BOOK1〈4月―6月〉59頁⁽¹⁷⁾〕

○これという破綻も矛盾もなく。しかしそれが今ではばらばらにほどけかかっている。〔BOOK1〈4月―6月〉163頁⁽¹⁰⁾〕

○最初の二ページをばらばら読んだだけであっさり放り出しちまうさ。〔BOOK1〈4月―6月〉37頁⁽¹⁹⁾〕

○パジェロはびかびかに磨かれていたが、ジャガーは旧式のもので、そもそも色がわからなくなるくらいたつぷりと白いほこりをかぶっていた。〔BOOK1〈4月―6月〉209頁⁽²⁾〕

○「ほら、お姉さんが今からしっかりとかわいがってあげる。びくびく喜ばせてあげるからね」〔BOOK1〈4月―6月〉118頁⁽¹²⁾〕

○全身の筋肉がびくりと収縮した。〔BOOK1〈4月―6月〉72頁⁽⁷⁾〕

○その物語は天吾の手による改変を切実に求めていたし、彼はその求めをひしひしと感じ取ることができた。「BOOK1〈4月―6月〉182頁⑮」

○長身でひよろりと痩せて、口がいやに大きく、鼻がいやに小さい。手脚が長く、指の先にニコチンのしみがついている。「BOOK1〈4月―6月〉42頁⑩」

○「そういうわけじゃない」と青豆は言った。そして両手の指をひらひらと小さく振った。「BOOK1〈4月―6月〉162頁⑬」

○彼らの感情はひとつの側に転ぶことができぬまま、不安定な秤はかりのようにふらふらと揺れていた。

「BOOK1〈4月―6月〉28頁⑭」

○蝶がふらふらと宙をさまよってきて、彼女の青いワークシャツの肩にとまった。「BOOK1〈4月―6月〉151頁⑥」

○その声の変化に驚いたように、女主人の肩口にとまっていた蝶が目を覚まし、羽を広げてふらふらと宙に飛び立った。「BOOK1〈4月―6月〉155頁⑦」

○そんなとき、父親のあとをふらふらと歩きながら、このまま倒れて死んでしまえたらどんなにかいいだろうなどよく思った。「BOOK1〈4月―6月〉169頁②」

○大型トラックが反対車線を通り過ぎ、階段をぶるぶると揺らせた。風が鉄骨の隙間を音を立てて吹き抜けた。「BOOK1〈4月―6月〉28頁⑤」

○電車が間もなく発車するという早口の簡単なアナウンスがあり、やがて旧弊な大型動物が目覚めて身震いするみたいに、ぶるぶるという大げさな音を立てて車両のドアが閉まった。「BOOK1〈4月―6月〉207頁⑦」

○赤いスズキ・アルトに乗った小さな女の子が、助手席の窓から顔を突き出し、ぽかんと口を開けて青豆を眺めていた。「BOOK1〈4月―6月〉24頁⑨」

○ほっそりとした体つきだったが、そのバランスからすれば、胸の大きさはいやでも人目を惹いた。

「BOOK1〈4月―6月〉88頁⑤」

○環は小柄で、どちらかといえばぼつちやりとしている。乳房も大きい。「BOOK1〈4月―6月〉60頁⑩」

○うらぶれて色褪せたゴムの木だった。葉はぼろぼろになり、あちこちで茶色く枯れている。「BOOK1〈4月―6月〉57頁⑨」

○その音楽が流れてきて、スイッチが自動的にオンになって、私の中にある何かの記憶がむくむくと覚醒したのかもしれない。「BOOK1〈4月―6月〉199頁⑤」

○虫が脱皮するときのようにもぞもぞと体を動かしてそこから抜け出し、畳もせずトナリの椅子の上に置いた。「BOOK1〈4月―6月〉88頁②」

○反対行きの車線を大型トラックが通り過ぎるたびに、高いヒールの下で路面がゆらゆら揺れた。

「BOOK1〈4月―6月〉24頁⑦」

B 擬音語表現

○ふかえりは鍵のかかかっていない玄関の戸口をがらがらと開けて中に入り、天吾についてくるように合図した。「BOOK1〈4月―6月〉209頁⑬」

○相手は初めはくすぐったがっていたが、そのうちにくすぐす笑いが止まった。息づかいが変わった。「BOOK1〈4月―6月〉59頁①」

○気がつくあたりはざわざわという話し声で満ちていた。「BOOK1〈4月―6月〉103頁⑯」

○中からももぞもぞと声が聞こえ、ドアが小さく開く。「BOOK1〈4月―6月〉67頁①」

○そしてポウルに盛られた塩つきプレッセルをぱりぱりと音を立てて嚙った。「BOOK1〈4月―6月〉249頁⑫」

- 足を乗せる前から既に氷はみしみしと音を立てている。「BOOK1〈4月―6月〉182頁⑦」
- それからボールペンの尻で、長いあいだ前歯をこつこつとつついていた。「BOOK1〈4月―6月〉192頁⑫」
- 青豆はボールペンの尻で前歯をこつこつと叩き続けた。そして頭脳を回転させた。「BOOK1〈4月―6月〉194頁⑭」
- それからまたボールペンの尻で前歯をこつこつと強く叩き、喉の奥で重いうなり声を立てた。「BOOK1〈4月―6月〉195頁⑯」

比喩表現

「…みたいに」

- そしてまるでとめていた紐が切れて仮面がはがれ落ちたみたいに、彼女はあつという間にまったくの別人になった。「BOOK1〈4月―6月〉25頁⑯」
- 『ビリー・ジーン』。ストリップ・ショーのステージにでも立っているみたい、と彼女は思った。「BOOK1〈4月―6月〉27頁⑮」
- 君にもわかるし、俺にもわかる。それは風のない午後の焚き火の煙みたいに、誰の目にも明らかに見て取れる。「BOOK1〈4月―6月〉40頁⑨」
- 何かあつていったん黙り込むと、月の裏側にある岩みたいにいつまでも黙っている。表情もほとんどなくなり、体温さえ失われてしまったみたいに見える。「BOOK1〈4月―6月〉43頁⑥」
- 「芥川賞」と天吾は相手の言葉を、濡れた砂の上に棒きれで大きく漢字を書くみたいに繰り返した。

「BOOK1〈4月―6月〉47頁⑱」

○マスコミは夕暮れどきのコウモリの群れみたいに頭上を飛び回るだろう、本は作る端から売れる」

○冥王星のわきをそのまま素通りしていった孤独な惑星探査ロケットみたいに。「BOOK1〈4月―6月〉141頁⑪」

○気の毒な警官が三人、ミシンをかけられたみたいにならずたにされた。「BOOK1〈4月―6月〉161頁⑨」

○電車が間もなく発車するという早口の簡単なアナウンスがあり、やがて旧弊な大型動物が目覚めて身震いするみたいに、ぶるぶるという大げさな音を立てて車両のドアが閉まった。電車はようやく心決めたみたいにゆっくりプラットフォームを離れた。「BOOK1〈4月―6月〉207頁⑦⑧」

「…みたいな」

○なんだかこれから結婚の申し込みに、相手の両親に会いに行くみたいな気分だな、彼は思った。「BOOK1〈4月―6月〉207頁⑱」

「…ように」

○その両目は優秀な甲板監視員のように、怠りなく冷ややかだった。「BOOK1〈4月―6月〉25頁⑯」

○午後の太陽の光を受けて、フロントガラスがミラーグラスのようにまぶしく光っていた。「BOOK1〈4月―6月〉27頁⑪」

○世界はゆるい粥のようにどろどろとして骨格を持たず、捉えどころがない。「BOOK1〈4月―6月〉31頁②」

○季節を間違えて、予定より早く目を覚ましてしまった**冬眠動物**のように。〔BOOK1〈4月―6月〉33頁⑨〕

○コーチが少しずつバーの高さを上げていくように。〔BOOK1〈4月―6月〉44頁⑮〕

○いろんな書き直しのアイデアが、**太古の海における生命萌芽のざわめき**のように、彼の頭の中に浮かんだり消えたりしていた。〔BOOK1〈4月―6月〉125頁⑫〕

○真夜中の**悪魔**のように熱くて濃いコーヒーが彼女の好みだ。〔BOOK1〈4月―6月〉153頁⑰〕

○**野良犬**のように罵られこともあった。〔BOOK1〈4月―6月〉167頁⑱〕

○それぞれにリュックを背負い帽子をかぶり、遠足に出かける**小学生**のように賑やかで楽しそうだった。〔BOOK1〈4月―6月〉184頁⑩〕

○それほど太っているというでもないのに、手首が**ハム**のようにむくんでいた。〔BOOK1〈4月―6月〉188頁⑫〕

○鯨が水面に浮上し、巨大な**肺**の空気をそっくり入れ換えるときのように。〔BOOK1〈4月―6月〉192頁⑨〕

○ひどく酸っぱいものを口の中に含んでしまったときに、青豆は顔をしかめた。〔BOOK1〈4月―6月〉195頁⑮〕

○イスラエル人を率いる**モーゼ**のように。頭が切れて、弁も立ち、判断力に優れている。〔BOOK1〈4月―6月〉224頁④〕

○彼女の野菜の食べ方は**芸術品**のように美しかった。〔BOOK1〈4月―6月〉240頁①〕

「…:ような」

○その黒い目には**絹**のような鮮やかなつやがあったが、前に会ったときと同じように表情はまるで見受けられなかった。〔BOOK1〈4月―6月〉175頁④〕

○頭の芯にもつれた**糸**のようなかたまりがある。〔BOOK1〈4月―6月〉175頁⑰〕

○「あれは、じきに世界が終わるんじゃないかというような痛みだ。ほかにうまくたとえようがない。ただの痛みとは違う」、ある男は青豆に説明を求められたとき、熟考したあとでそう言った。〔BOOK1〈4月―6月〉233頁④〕

○「じゃあ逆の言い方をすれば、じきに世界が終わるといふのは、**隼丸を思い切り蹴られたとき**のようなものかしら」と青豆は尋ねた。〔BOOK1〈4月―6月〉233頁⑧〕

並列句表現

○時間にして十秒ほどのその鮮明な映像は、前触れもなしにやってくる、予兆もなければ、猶予もない。ノックもない。電車に乗っているとき、黒板に数式を書いているとき、**食事をしているとき**、誰かと向かい合って話をしているとき（たとえば今回のように）、それは唐突に天吾訪れる。〔BOOK1〈4月―6月〉31頁⑱〕32頁②〕

○分厚い一枚板でつくられた低いテーブルの上には、まったく何も置かれていない。灰皿もなく、テーブル・クロスもない。壁には絵も掛けられていない。時計やカレンダーもない。花瓶のひとつもない。サイドボードの**ようなもの**もない。雑誌も本も置いてない。色褪せて、柄も見分けられなくなったような時代の**絨毯**が敷かれ、同じくらい古いソファ・セットが置いてあるだけだ。〔BOOK1〈4月―6月〉210頁①〕⑤〕

類推の表現

○絵の間違い探しと同じだ。ここに二つの絵がある。左右並べて壁に掛けて見比べてみても、そっくり同じ絵のように見える。しかし注意深く細部を検証していくと、いくつかの些細なものが異なっていることがわかる。「BOOK1〈4月―6月〉199頁⑩～⑫」

辞書の意味的表現

○「専門職」と男はくり返した。「一般の人にはあまりできない、専門的な技能と訓練が必要とされる職業」 あんたは歩く**広辞苑**か、と青豆は思った。「BOOK1〈4月―6月〉108頁⑬～⑮」

○「…それは言うなれば、脳味噌の**纏足**のようなものだ」「テンソク」とふかえりは尋ねた。「昔の中国で、「幼い女の子の足を小さな靴に無理矢理はめて、「おおきくならないようにした」と天吾は説明した。」「BOOK1〈4月―6月〉223頁⑭～⑯」

日本古典作品引用表現

○成立過程としては『古事記』とか『平家物語』といった口承伝承と同じだ。「BOOK1〈4月―6月〉180頁⑱」